

大山へ来た観光客の総数（講社員も含む）は年間 70 万人を越えている。講という形での参詣者は急激に減少するような兆はないが、おそらく徐々に減少して行くであろう。従って大山の旅館業が存続していくためには、今後さらに一般の観光客の受け入れが必要になってくるし、また実際に、大山地区では観光客をどんどん受け入れようとする動きがある。

## 松川扇状地における集落の変遷

### — 小布施町を中心として —

小林 奈緒子

所謂、善光寺平といわれる千曲川下流に存在する長野盆地の東縁…河東地方の一中心地として発展してきたのが小布施町である。

小布施町は、紫根萩山・明覚山・雁田山との間の断層崖下に、白根山より発する松川と紫根萩山に発する八木沢川によってつくられた松川扇状地の右扇に立地する。

この扇状地上において小布施町を構成しているのは、山王島・押羽・羽場・北岡・林・町組・福原・大島・飯田・清水・矢島・中子塚・中条・雁田・松村・六川の 16 の各部落である。

これらの各集落の、成立・変遷・現在の状況を通して、それぞれの集落としての特性を明らかにしようとしたのが、この論文である。

紙面の都合もあるので、次に小布施町における 16 の集落のうち、特徴のあるものの概観を記す。

尚、各部落名の次の数字は、戸数と世帯人員数、農業就業人口である。

○ 山王島……110 戸，481 人，200 人

扇端部と千曲川沿岸沖積地上にある。氏神を河東山王島神社という。そこの大光寺は、千曲川の中州浅野島にあったといわれ、千曲川氾濫原から扇状地末端に移動してきたことを示す。

土地利用においては野菜栽培に特色が見られる。全耕地に対する野菜栽培面積は、17.7%と、小布施町における集落中で最高を示し農産物販売のうち、野菜販売による収入が第 1 位を占める農家が、25%であるのも特徴である。

○ 矢 島……78 戸，429 人，152 人

矢島堰の流末が、長く路に沿って延徳低湿地に延長し、その道路の両側に一戸ずつ並んだ模式的列村形の路村である。

氏神は、矢島郷神社といい、北方 3km 長丘丘陵の南篠井岸にある。ここは、千曲川につくった自然堤防上であるが、千曲川の氾濫により延徳への逆流は決壊されて、慶長 19 年（1614）現在の地に移転してきたといわれる。

一戸当りの平均耕地面積は、98.1a と大島に次いで多く、水田率は、37.9% と清水に次ぐ。

○ 大 島……184 戸，928 人，335 人

松代街道と、これに T 字型に交わる旧善光寺街道に路村型に成立している。元和年間の新田開発により開けた部落である。

大島は、小布施町における最も生産性の高い農業集落である。一戸当り平均耕地面積は115a、専業農家率40.1%、一戸当りりんご園面積71.5aと全て、集落中第1位を示す。

以上の様に、16の集落を概観した結果、現在の各集落に至るには、どの集落においても、自然条件・歴史的発達要素が、深く関わっている事が解った。

## 山梨県曾根丘陵地域における養蚕業

鈴木京子

1930年の恐慌後、養蚕業の衰退は著しいが、甲府盆地南縁の曾根丘陵地域は、果樹生産地に隣接しながら養蚕地帯を形成している。本論文では、曾根丘陵地域における養蚕業の現状を把握し、その背景をさぐることを研究目的とした。

第1章・第2章で、自然人文環境の両面より本地域の養蚕業の背景・果樹化の遅れた要因について考察し、第3章に於て、全国の養蚕業の変遷・現状を把握した。これらを基礎として、曾根丘陵地域の養蚕業については第4章で言及し、山梨県又は甲府盆地内での位置付けを行ないながら、その特徴を明らかにした。

近世より柳沢吉保の養蚕奨励・郡内織生産地の存在・副収入を求める零細業の存在が、明治以降も県令の養蚕・製糸業の奨励をはじめ現在に至る県・関係諸機関による援助が、山梨県さらには曾根丘陵地域の養蚕業の進展・存続に果たした役割は大きい。戦後、甲府盆地では桑園の果樹園化が進んだが、気候的には多雨で、地形的には排水不良の平地と傾斜の比較的急なうえ、干害を受けやすい丘陵地からなり、道路網も未整備である曾根丘陵地域は果樹栽培には適さない。

このため、この地域は桑園残存率・桑園率の高い山梨県の中でも特にその値が高い、県下随一の養蚕地帯となっている。その上、反当収繭量が高く、一戸当り規模も大きいため労働生産性が高く高収入を誇る。県・関係諸機関の援助に加え、集約的経営につとめ、肥料・労力の大量投下、掃立回数の増加、一之瀬種の使用を行なった結果である。又、開墾、田畑からの転換、さらには桑園の借用、買桑によっても規模拡大しようとする積極的養蚕農家が存在するため荒廃桑園もなく、集落あるいは町村単位の養蚕地帯としての性格を持つ。

しかし、養蚕業の衰退はくいとめられず、安い輸入品に国内市場まで奪われかねない情勢となって、ついに輸入規制措置までとられた。特に最近の桑園面積の減少は全国・山梨県共に激しく、曾根丘陵地域でもこの数年間で養蚕業のピークはすぎている。さらに稚蚕共同飼育の遅れ、傾斜地・肥料労力の大量投下の結果として労働時間が多く、生産費が高い、居宅内での蚕飼育、老朽桑園といった問題を抱えるうえ、近年は、この地域の養蚕業の優位性を表わす土地生産性の高さ、大規模経営ということに関しても頭打ちである。こうして果樹との収益面での差も拡大しつつあり、所得面でのこの地域の農家の県内における位置も、果樹地帯の農家に追い越されて相対的に低下し、それに伴って兼業率は増加した。地域内部での農業粗生産額の構成面でも養豚・野菜・果樹の比重が増加しており、曾根丘陵地域は養蚕専業から、これらとの複合経営に移行しつつあるといえる。ただし、養豚は厩肥の